早川町応援団獲得マガジン

やまだらけ

YAMADARAKE

FEBRUARY
No.21
2007

山の民と狩猟

11月15日、猟期が始まる。初猟の日、仕事を休んで猟に出かける人もいるほど、猟師はこの日を心待ちにしている。

早川町には現在、40人の猟師がおり、10人程度のグループが4つある。中には、単独で罠や犬を使った猟をする人もいるが、週末には数人が集まり、セコ猟と呼ばれる犬を使ったグループ猟で、猪や鹿を獲る。

猟の仕方は、地域によって様々だが、早川町内で行われているグループ猟に、大きな違いはない。セコと呼ばれる人が、犬を連れて山に入り、犬が獣を追っているか、獣がどの辺りを逃げているか、無線でマグサに伝える。マグサとは、獣が犬に追われて逃げる道のことで、犬に追われて獣が逃げてくるのをマグサで待ち伏せする人のこともそう呼ぶ。犬に追われると、猪は山の中の平坦地か谷間で犬と格闘し、ブーブー威嚇しては逃げる。鹿は走って熱くなった体を冷やすことと、川の中を長い脚で巧みに走って臭いを消し、犬の追跡をかわすために川に下りる。獣によってマグサは変わるうえに、マグサをはった場所に必ず獣が逃げるとは限らない。セコはその場の状況をよく読んで、必要ならばマグサに移動の指示を出す。しかも、状況は刻一刻と変わり、悠長に考えている暇はない。命がけで逃げる獣を、そう簡単には獲れないのだ。猟師はそんな獣との知恵比べをおもしろいと言う。

今回、「かのし会」の猟師たちが、「ニクの日」と称して年内最後の猟を行う12月29日を追った。

かのし会「ニクの日」ドキュメント

12月29日、くもり。風が強く、今年一番の冷え込みだ。午前8時30分、早川町西山地区の猟師のグループ、かのし（ここの方言で鹿のこと）会のメンバーが、かのし小屋に集まってきた。この日集まったのはメンバー12人のうち8人。年齢は下が27歳から上が75歳までと幅広い。猟犬を引き連れ、肩には銃がかけられている。そして、一様に緊張と期待の入り混じった表情をしている。

■眠い目をこすりながら相談。細かい地名や猟師仲間の隠語が多く、会話の中身を理解するのは難しい。

集まるとまず、どこの山で猟をするか、誰がセコをやり誰がどのマグサに着くか、ほとんど長年の勘で猟場を決める。およそ15分で猟場が決まり、すぐに移動だ。一回戦は鹿を狙う。セコは荒居さん。犬は荒居さんのマーだ。犬に追われると、鹿は、走って熱くなった体を冷やすためと川の中を長い脚で巧みに走って臭いを消し、犬の追跡をかわすために川に下りてくる習性がある。4人のマグサは河原へ下りて鹿を待つ。

午前9時頃、それぞれが位置につき、セコの荒居さんからマーを放したという無線が入る。猟の始まりだ。鹿が追われて川に下りてくるまで、4人のマグサは河原でひたすら待つ。猟が始まって30分、山を歩いている荒居さんから「新しい足跡は見当たらない」との無線が入る。山を変えようとの声も上がるが、もう少し様子を見てみることにする。だが、犬は獣の匂いを捕らえられない様子で、一向に鳴き声は聞こえてこない。午前10時、仕方なく山を変えることになった。

■河原にはるマグサ。どこから来てもいいように、神経を集中する。獣に気取られない（気付かれない）ようじっとしているので、余計に寒さが身にしみる。

満を持してエース犬ペロの投入

再びかのし小屋に集まった後、今度はさっきより少し北の、川をはさんで反対側の山を猟場にする。今回は猪も狙って、二人のセコが計8匹の犬を連れて山に入る。鹿を追わせたら右に出る犬はいない、エースのペロも投入だ。

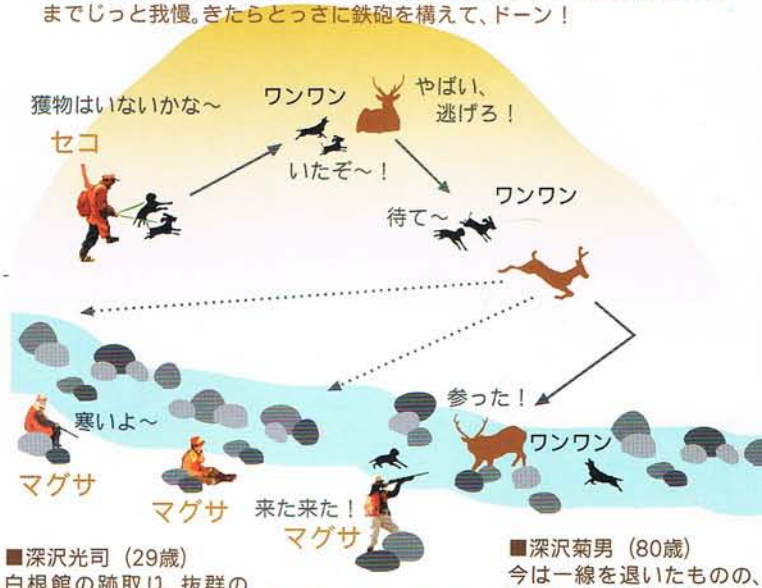
すると、犬を放して5分経つか経たないうちに、河原にはっていたマグサの荒居さんから鹿を仕留めたとの無線が入る。獲れる時はこんなもの。山を変えて正解だったようだ。

犬達はまだまだ元気なので、すぐ二回戦に突入。マグサは強い風が吹き付ける中、銃を脇に、再びじっと待つ。40分程経過した午前11時過ぎ、突然マグサの一比児さんの元へ、1匹の犬が河原の上の方からとことこ歩いて下りてくるのが見えた。かなり走ったのだろう。息が荒い。一比児さんは急いで川の上へ移動する。

■犬の表情ががらりと変わる。引き締まったいい顔付きだ。これから山に入ることが、ちゃんとわかっているようだ。

セコ猟の仕組み

かのし会の猟は「セコ猟」と呼ばれるもの。犬を連れて山に入り獲物を追い出す人を「セコ」、獲物の逃げ道で待ち伏せをする人を「マグサ」と呼ぶ。セコは犬とともに獲物を探す。見つけた獲物を犬が追い始めたら、何がどの方向に逃げたかなど、マグサに状況を伝える。マグサは獲物が来るまでじっと我慢。きたらとっさに鉄砲を構えて、ドーン！



歳）
勤務。
獣肉
品。

■深沢一比児（57歳）
かのし会の宴会部長。決めゼリフは「なんちゅう、うまいど～か～」

■深沢洋志（27歳）
白根館の三男。数ある（？）失敗談も、その愛嬌で笑いに変える。

■荒居薫（65歳）
狙った獲物は逃さない。冷静沈着なかのし会の名スナイパー。

■深沢光司（29歳）
白根館の跡取り。抜群の狩猟センス。早川町猟友会希望の星。

■中村正治（43歳）
物静かな猟師。マグサでの捕獲率は、かのし会NO.1。

■深沢菊男（80歳）
今は一線を退いたものの、猟のときは無線で仲間にエールを送る。

■日本と早川における猟の歴史

私たちの祖先は、狩猟と農耕で生きてきた。食料を得るため、農作物を守るため、猟は生活の一部として欠かせないものだった。江戸時代に銃を使うようになるまでの長い間、罠や手槍、撲殺具のみで獣を獲っていた。

早川町奈良田では、西山からの道が整備される昭和26年以前、動物性たんぱく質は山で獲る以外なく、カモシカ、ウサギ、猪、鹿、熊、猿などを獲った。特に奈良田には、「熊ビラ」と呼ばれる木を組んで作った罠があり、他に類のない罠の技術を有していた。獲れた獣は貴重な動物性たんぱく質だったので、物々交換により集落で分け合い、生でも食べたという。残った肉は、火で炙って乾燥させたり、味噌漬けにしたりして保存した。また、西山温泉の湯治客に肉を売っていたとの話もある。

江戸時代後期、全国的に野性鳥獣の毛皮や内臓が市場で価値を持ち始め、猟で現金収入を得る人も現れる。結果、ウサギ、キツネなどの良質な毛皮の小動物は乱獲され、生態系は乱れていく。政府はそれに危機感を抱き、明治末期より鳥獣保護の方針を打ち立てた。現在の狩猟は鳥獣保護と有害鳥獣駆除を目的とし、鳥類28種、獣類20種を狩猟可能と法律で定め、生態系の回復と維持に努めている。

■名犬の条件

肇さんの犬、ペロは、鹿を追う名犬だ。他の犬とどう違うのか。名犬の条件を聞いた。名犬とは、まず、鼻が利くことと足が速いこと。これ、当然。さらに良いのは獣を追いながら鳴くこと。鳴いてくれると、猟師もどこを獣が逃げているのか判って、すごく助かる。そして、意外なことに、ちょっと臆病な方がいいらしい。勇敢すぎると、獣に飛びかかってケガをしたり、獣を噛み殺したりしてしまうのだ。広い山の中で噛み殺された獣を探すことはほとんど不可能に近いので、猟は失敗ということになってしまう。

そして、ペロの一番すごいところは、鹿の逃げ道を先回りできること。普通の犬は、鹿が通った後を素直に追いかけて行くが、鹿の逃げ足の方が速いので、追いつけない。それを知っているペロは、「直路（すぐじ）」と呼ばれるコース取りでジグザグに逃げる鹿の先に回るのである。優れた嗅覚だけでなく、獣の逃げる音を捉える聴覚も冴える一流犬にしかなせない技だ。

■猟師の高齢化と獣害問題

現在、猟友会に登録している猟師は全国でおよそ13万5千人、そのうちの40人が早川町民だ。昭和50年には早川町に165人いた猟師も、昭和60年には104人、平成8年には67人と、年々減少の一途をたどっている。年齢別に見ると、現在、一番若い人が27歳、最高齢はなんと86歳。20代、30代、40代はそれぞれ2人ずつしかおらず、逆に70代以上は8人もいる。50代から60代が主戦力で、高齢化は否めない。数十年後の早川町に、もはや猟師はいないかもしれない。

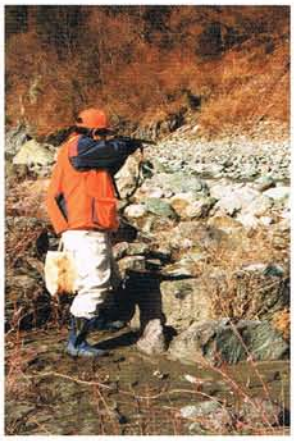
近年、獣が人家周辺に出没し、田畑を荒らすというニュースをよく聞く。その原因を作っているのは人間自身という話もあるが、山に暮らす人にとって、獣の被害は生活に関わる深刻な問題だ。現在、鳥獣被害があった場合は、役場から猟友会に駆除の要請をし、猟師によって駆除される。もし猟師がいなくなれば、出没する獣の数はますます増えていく。田畑は荒らされ、人間は狭い地域で、獣に怯えながらの生活を強いられるかもしれない。

普段あまり実感することはないが、獣と隣り合って暮らす私たちが、野生動物と共生し、安全に暮らしていくために、猟師はなくてはならない存在だ。

が、そのとき、犬の鳴く声が下の方から聞こえた。一比児さんの顔に焦りの色が見える。踵を返し、川の下へ急ぐ。ちょうど数匹の犬が山から走り下りてきたところだった。対岸からこちらの岸に向かって激しく吠えている。どうやら鹿は川を越え、反対側の山に逃げてしまったようだ。犬達はしばらく興奮して河原をうろうろしていたが、やがて川を泳いで渡り、山に逃げ込んだ鹿を勢いよく追っていった。

その瞬間が来た！

もう一度、逃がした鹿を犬が追って川に下ろしてくれるよう願う。そして、まもなく12時になろうかという頃、何かが跳ねるように軽やかに、川の上流から下りてくる。来た。鹿だ。体長1ｍくらいだろうか。1本角のオス鹿が、50ｍほど離れた所にいる。もう十分、射程内だ。鹿に向かって背を向けていた一比児さんはひらりと体をひるがえし、軽く足を開いて立つ。銃を構える間もなく、ドーンという大きな爆発音が響き渡り、体が衝撃で後ろにのけぞる。銃口の先には、ぐったりと倒れる鹿の姿。ついさっきまで生きていたとはもう思えない。あっという間の出来事に、一比児さんは「獲ったね」と満足げな顔を見せた。



一犬、二足、三鉄砲

早川の猟師の間には、一犬、二足、三鉄砲という言葉がある。猟に大事なのは、まずその嗅覚と脚力で獣を追う犬、その次に犬を山に連れて行く人の足、そして最後に獣を撃つ鉄砲の順という意味だ。とにかく、優秀な犬がいれば、猟はほぼ成功する。だが、相手は生き物だ。当然、思い通りにならないこともある。経験したことのない展開にもなる。ベテランでも、突然、獣が目の前に現れたり、一発でしとめられなかった獣が向かってきたり、怖い思いをすることがある。逆に、初心者が大物を仕留めることもある。猟師たるもの、状況をよく把握し、瞬時にしかも冷静に判断しなければならない。少しでも判断を誤れば、ケガどころでは済まされない。

しかし猟師は、それが猟のおもしろさだと言う。この緊張感を楽しむ余裕は、長年の猟の経験と、山をよく知っているからこそ生まれるものだろう。（平川寛子）

■湯村重照
奈良田の里
食堂で出さ
は、この人の

■深沢孝治（43歳）
今は町外に住んでいるが、猟の季節になると足繁くふるさとに通う。

■早川優太（23歳）
肇さんの甥っ子。最近入会したばかりで、猟の素質は未知数。

■深本梅次郎（75歳）
猟師歴50年の大ベテラン。グレーの長髪がトレードマーク。

山人インタビュー⑥

かのし会の中心メンバー、深沢守さんと深沢肇さんにお話を伺いました。

■山の神に捧げたお神酒を回し飲む。このときばかりは一同神妙な顔つき。いつもはコップだが、今日は人数が多いのでお椀。

獲物が獲れれば、それで猟が終わり、というわけではない。仕留めた鹿を川から引き上げ、解体作業に入る。鋭いナイフを使って皮をはぎ、内臓を取り出し、肉を部位ごとに分ける。肉は猟師が分け合って持ち帰り、日持ちしない内臓類はその場で料理される。それをつまみに、いよいよ宴会だ。

そこで猟師たちは、山の神様に感謝し酒を回し飲み、武勇伝を語り、失敗談を明かす。これは「絵語り」と呼ばれる大事な猟の一部で、そこで得た情報はその後の猟に活かされる。鹿を2匹獲ったこの日の宴会は大いに盛り上がり、猟の一日は夜遅くまで続いた。そんな席で、いろんな話を聞かせてもらった。

かのし会ができたのはいつごろですか？

肇：俺が猟を始めた頃は、特に決まったグループはなくってね、声を掛け合って、行ける人と猟に行ったっちゅうわけ。猟師の数が多くて、ベテランの猟師はわざわざ獲れないかもしれない初心者を連れて行かんだよ。俺は下湯島の若い連中４～５人で、猟に行っていたわけ。そのとき、まぐれで鹿を獲ってから、これはおもしろいなってことで猟を続けとうだけど。昭和60年頃かな、守さんと行き始めて、いろんな人に声をかけとううちに、今のメンバーのかのし会ができたっちゅうわけ。

■深沢肇（52歳）
早川町役場勤務。鉄砲も罠もこなす万能ハンター。しかし、かつては漁師になりたくて家出をしたことも。

猟のおもしろさは何ですか？

守：猟はうまくいかない時のほうがおもしろい。どの犬がどの辺で獣を追っているか、その時々の状況によって、全然違う展開になるからね。獣と知恵比べをして、追っている時が一番興奮するね。毎回違って、そのたびに勉強になるし。苦労してでも獲りたいものを獲りたいじゃんね。簡単に獲れるじゃおもしろくないね。

犬が大事だと聞きますが、犬を選ぶ秘訣はありますか？

守：生まれて7ヶ月くらい経たんと、名犬になるかどうかわからん。いくら親が良くても、その子どもが全部良いとは限らんしね。素質があれば経験を積ませるだけど、あとは子犬自身が勉強し、名犬になったりならなかったりだよ。

猟へのこだわりはありますか？

守：かのし会としては、１発で獣を獲るように、徹底して若いのに教える。２発、３発撃てると思うと、人間、どうしても甘えちゃうからね。犬が獣を完全に止めていて、撃つのに余裕がある時だったら頭を狙って撃つよ。肉が傷まないし、宴会で自慢できるからね（笑）。

それから、獲った肉は全部食べないかん。そうせんと、山の神様に申し訳ない。たまに犬が山で獣を噛み殺しちゃったり、半矢（弾は当たったが致命傷にならない）で逃げた獣が山の中で死んだりして、見つけられん時、ほんと山の神様に申し訳なくって、どうしたもんかと思うよ。あとな、思うだけど、スーパーで肉を買えるのは、それを殺してさばいている人がいるっちゅうこんだろ。それを知らんで肉を食べるじゃなくて、知って食べて、ありがたみを感じんといかんな。

肇：そうだな。野生の動物を獲ってかわいそうだと言う人もいるだけど、家畜として育てられる牛や豚は、生きる喜びも辛さも知らずに殺されていくわけ。野生の動物は、人間との勝負に負けた結果の話じゃんね。食べられるだけの牛や豚の方がよっぽどかわいそうじゃねえけ。

■深沢守（58歳）
秘湯として名高い温泉旅館「白根館」の館主。山を熟知する経験豊富なかのし会のリーダー。

■読者の声

●昭和20年３月７日から昭和32年３月22日まで笹走で育ちました。今回の記事は当時を思い出させてくれました。（柏市、Mさん）

編集部：笹走は日当たりもよく気持ちのいい所です。早川往還が町外への主要道だった頃は、町の玄関口でした。しかし今は、過疎高齢化が著しく、町内でも存続が危ぶまれる集落の一つです。当時は、どんな様子だったのでしょう。

●実に詳細に取材されていて、立派だと思います。山村でしかも長い町ですから多角的に取り上げる必要があるかと思いますが、それも出来ていて素晴らしいと思いました。（甲府市、Aさん）

編集部：ありがとうございます。前号ではこれまでと少し趣向を変え、町が抱える深い悩みを読者の方々と共有してみたいと考えました。

●山のふところに抱かれた、野趣に富んだ良い所でした。地元の季節料理や特産品をもっと紹介して欲しいです。（富士市、Wさん）

編集部：早川町にお越し頂いてありがとうございました。やまだらけも来年度（23号）からマイナーチェンジし、内容のさらなる充実を図る予定です。今後のやまだらけに乞うご期待！

■NEXT やまだらけ

22号特集（３月下旬お届け）

「桜前線北上中！」

南北に長い早川町。町の入り口から最奥の奈良田まで、その距離は約25km。そして標高差は500m。そんな地形の特徴を感じられるのが桜の咲く季節。早川町では、３月下旬から４月下旬まで、約一ヶ月に渡って桜が楽しめるのです。

次号では、早川町の桜スポットと満開の時期を一挙ご紹介。この春は、早川町で毎週花見だ！

山で食料を調達し、火をおこすことも料理することも難なくこなす猟師さん。頭の回転も速く、たくましく、とにかくかっこよかったです。例えどんな状況に陥っても、猟師さんと一緒にいれば、乗り切れる気がします。そして、山の神様への感謝を忘れない姿に、山に生き、自然と暮らす人間の本来の姿を垣間見ました。どうやら猟師さんに学ぶべきことが、まだまだたくさんありそうです。

山を覗けば宝の山
やまだらけ

発行元／フィールドミュージアム運営委員会
住　所／山梨県南巨摩郡早川町薬袋430　〒409-2727
電　話／0556-45-2160　ファクシミリ／0556-45-2268
ホームページ／http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/